

平成16年7月22日

4年前に発症した顔面痙攣

症例報告

木下典穂

4年前に左眼輪筋痙攣が出現した症例である。今年になって頬部から口輪筋にまで痙攣が拡がり、2月に脳外科を受診。片側顔面痙攣と診断され、6月に手術待ちの状況だが、できれば手術を避けたい母親の意向で5月に来院した。しかし、当人に手術を受ける意志が強く、2回の治療で脱落した。

症例 27歳 女性 無職

初診 平成16年5月10日

主訴 左顔面が痙攣する

現病歴 4年前（学生時代の終り頃）から左眼の周囲、とくに下眼瞼が痙攣するようになった。パソコンによる疲れ目と思い、何も治療はしないでいた。今年になって左頬部から口輪筋にまで痙攣が拡がり、2月初めに脳外科を受診した。一連の検査を受け、片側顔面痙攣と診断された。何も治療はせず、6月（1カ月後）に手術の予定である。当人は手術を受けるつもりだが、医師に手術で聴力障害が起きるかもしれないと言われたのを心配した母親と一緒に、親類の紹介で来院した。

精神的に緊張すると左眼周囲、とくに下眼瞼から頬部、口の周囲にかけて痙攣が起きる。痙攣が激しいと閉眼状態となる。疲労で誘発される。寝る前、寝起きが悪く、不眠気味である。痙攣は意志によって真似たり、止めたりはできない。左頰部が上へ引っ張られる感じがする。耳鳴り、聴力障害はない。これまでに顔面マヒの経験はない。その他、一般状態は良好である。痙攣が気になり、仕事にはついていない。痙攣が治ったら就職するつもりである。スポーツはしない。アルコールは飲まない。

既往歴 特記すべきものなし

家族歴 特記すべきものなし

診断 臨床症状から片側顔面痙攣と診断した。

対応 精神緊張や疲労で痙攣が誘発されるようですが、鍼をするとリラックスできて疲れがとれ、夜も良く眠れるようになります。必ずしも痙攣に対して効果があがると断言はできませんが、少しでも状態が良くなるように治療していきましょう。来月手術ということですので、それまで週2回は通ってください。

治療・経過 治療は循環障害の改善と、精神緊張や疲労の軽減を目的に行った。ステンレス鍼の1寸3分2番（40mm-18号）を用い、まず仰臥位で左の瞳子髎、巨髎、地倉、頰車に斜刺で5mm刺入し、次にゆっくりとやや右下側臥位になってもらい、左の完骨、風池、肩井、曲池に斜刺で1cm刺入し、10分間の置鍼をした（図1）。

治療に対する緊張のためか、刺鍼直後から痙攣が誘発された。

生活指導 誘因となる精神緊張や疲労をできるだけ避けるようにしてください。

治療後、母親に 週2回ほど治療をして経過をみていきます。少しでも良くなって、手術を避けられるといいですね。

母親 当人は痙攣が良くなるならば、聴力障害が起きても構わないと、手術を受けるつもりですが、「この手術で死んだ人はいない」「聴力障害が起きるかもしれない」と言われると、親としては心配です。

第2回（5月13日、4日目） 一人で来院。治療をする前から左顔面が痙攣している。前回の治療に、八会穴の筋会である陽陵泉へ斜刺1cmの単刺を加える。

次回から雀啄術を加えようと治療計画を立てていたが、以後患者は来院していない。

考察 本症例は好発年齢よりは若年だが、片側顔面痙攣と診断した¹⁾²⁾。

理由は以下の通りである。

- 1) 一側性である。
- 2) 眼輪筋に初発している。
- 3) 間欠的、不規則な筋収縮である。

4) 意識的に真似たり、止めることはできない。

また、以下の類症疾患を除外した。

1. 顔面神経マヒ後の顔面痙攣^{1) 2)}

本症例は顔面神経マヒの経験がない。

2. 顔面チック^{1) 2)}

若年発症で小児に多く、通常両側性で、顔面神経支配筋以外にも波及する。

3. 眼瞼痙攣^{1) 2)}

両側眼輪筋の筋収縮による不随意的閉眼の反復である。

片側顔面痙攣は明らかな原因疾患を認める症候性と原因不明（血管による顔面神経の圧迫）の特発性に分類され、症候性では当然のことながら原因疾患の治療が最優先され、予後も原因疾患によりさまざまで、鍼灸治療の適応とは言い難い。

対して特発性は谷島、柳沢¹⁾によると「多くは徐々に進行性で半年から1年あるいは3年から4年の経過で患側顔面筋全体に障害が及び自然治癒は期待できない」が、「初発部位に限局する場合（106例中16例）、自然緩解例（106例中6例）」も報告されており、また「生命に対する予後は良い」とされているので、鍼灸治療を試みる可能性は残されていると考える。

本症例は症候性か特発性かの確認をしていないが、発症から4年間の経過をみても、医療機関の対応をみても、特発性片側顔面痙攣である可能性が極めて高い。したがって、治療効果があがると確約はせず、手術までの1カ月間経過をみていくことを患者や家族に説明し納得させ、鍼治療を試みたことは概ね妥当な処置であったと考える。しかし、患者自身の手術への意志が強かったためか、2回で脱落し、経過観察には到らなかった。

参考文献

- 1) 谷島定一、柳沢信夫：半側顔面けいれん、クリニカ Vol. 7 No. 4、P 278 ~283、1980.
- 2) 古川哲雄、沖山亮一：半側顔面痙攣、「図説 神経症候診断マニュアル」P 248, 249、医学書院、1996.

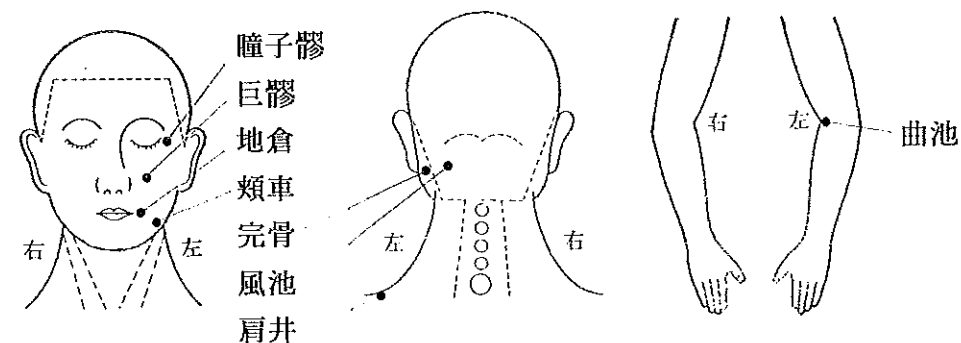


図1 初回の治療点